

Title	明治以後に於ける歴史學の發達(歴史教育研究會編纂, 四海書房發行)
Sub Title	
Author	伊丹, 榮七郎(Itami, Eishichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.191(571)- 193(573)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0191">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0191</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史家ギボンの説を引用してゐる。「世界歴史の開闢以來、各時代は人類の富や、幸福や、科學や、又恐らくは道德をも増進した。そして尙ほ増進する」

私は著者のかゝる進歩論をくどく紹介する代りに、歴史家フリーマンの言を引用しよう。「歴史に於ける進歩のあらゆる階段は、同じく又退歩の一階段である」。凡そ進歩論を、論ぜんとするならば、この難解を突破しなくてはならぬであらう。

而して最後の第三編史的階級闘争論、及び辨證法的唯物史觀の批評に於ては、先づマルクス、エンゲルスの共産黨宣言の階級闘争の歴史の淵源に就き考察し、それは佛蘭西革命當時のペペウフヤ、ルソーの自由平等の宣言にあるとなし、そしてそれは社會的惡たる不平等の結果より到來したるものであることを指摘した。かくして、スペンサー流の機械的社會進化論に基礎をおいた科學的社會主義者と自稱するマルクスや、エンゲルスの辨證法的唯物史觀を、忌憚なく批判し、論駁してゐる。

讀後の記憶を十分整理し難いが以上で大體本書の内容の概要を紹介したと思ふ。さて本書各篇の論文は、新規に執筆したものもあるらしいが、舊稿を増補修正したものも多いやうで、可なり重復してゐる點もある。併し大體に於て、著者の精神が一貫してゐることは、甚だ慶賀すべきことである。終りに著者の熱誠なる研究態度に謹んで敬意を表すると共に、著者が本書の序文に豫告されたる大抱負と計畫を近き將來に成就されて、讀者の机上に送られる日を待望する。(昭和八年七月四日山本光郎)

### 明治以後の歴史學の發達(歴史教育研究會編輯) 四海書房發行

我が國の歴史學も、明治維新から六十餘年、近代史學を受け入れてから既に四十餘年を経て居り、量的にも質的にも大なる發達をなした。人なら、そろ／＼傳記が出てよい年配である。されば我が國の史學にしても、維新以後に發達して來た史學の業績を綜合的に、全一的に取纏めた書物の存在を必要とするであらう。それは既に古くからこの學に關係し、寄與せられた人達にとつてはこよなき過去帳となり、今後の研究の糧ともなるであらうし、まだ斯學にたづさはつて間もない者やこれから入らうとする人々へは、進學の行路を指示する道標となり、足場ともなるからである。いはゞ歴史學それ自身の發達のために、この種の書物は永く缺けてゐるべきものでない。然るにそれを今日まで吾々は持つてゐなかつたが、幸に今本書が世に出て來て、渴望の幾分かを醫してくれることになつたのは、大なる喜びである。

本書は昨年雜誌「研究評論歴史教育」の増刊號として一度出たものを、そのまま改装して市場に送られた、所謂「量的に時間的に越えられない限界」を持つて生れた單行書であるが、流石に數多名家を煩して出來たものだけあつて、單にその構成と一部の内容を拜見したゞけでも、この方面に於ける開拓者としての位置を許されてもよい性質の書物と思はれる。

本書の構成を見ると、三上參次博士の「史學發達今昔の感」を序文として、その次に文化史學、國史學、東洋史學及び西洋史學

の四部門を置き、文化史學は一篇、國史學と東洋史學とは各十二編、西洋史學は三篇都合二十八篇の論文としてこれを二十八名家で分擔して居られるが、各篇の題目は明治以後に於ける史家の活動、歴史學の發達を認識するにいづれもふさはしいものと思はれる。いま念の爲本書の篇目と著者の名を擧げて見ると、「明治時代に於ける日本文化史の展望」松本彦次郎、「國史學發達の回顧」大森金五郎、「社會經濟史」土屋喬雄、「思想史」平泉澄、「宗教史」市村其三郎、「政治史」藤木邦彦、「法制史」瀧川政次郎、「外交史」秋山謙藏、「教育史」加藤仁平、「美術史」木代修一、「歴史地理學」鳥羽正雄、「日本考古學」後藤守一、「民俗學」折口信夫(以上は文化史學並に國史學の分である)、「東洋史學發達の回顧と展望」中山久四郎、「先秦時代史」橋本增吉、「漢南北朝時代史」志田不動齋、「唐宋時代史」三島一、「元代史」有高巖、「明代史」清水泰次、「清代史」松井等、「朝鮮史」稻葉岩吉、「滿洲蒙古史」和田清、「西域史」石田幹之助、「南海史」松田壽男、「東亞考古學」江上波夫(以上東洋史學の分)、「西洋史學發達の回顧と展望」大類伸、「明治三十年以前の西洋史」池田哲郎、「明治三十年以後の西洋史」山中謙二(以上西洋史學の分)となつてゐる。

次に本書の内容について二、三紹介すれば、三上博士の序文は本書の總論とも解すべきもので、博士の史學に於ける豊富なる經驗を基として、明治以後に於ける歴史學發達の跡を回顧されてゐる。大森教授、中山博士、大類博士の論文は各、國史學、東洋史學、西洋史學の部門の總括であつて、大森教授は自己の體驗を記されたる後、國史上疑問とされて今迄諸家の研究の對象となつた

諸問題の中、南北朝以前の分について所見を述べられ、中山博士は明治以後の東洋史學の成立、普及、研究の狀勢を記述して、これに評論を交へられ、大類博士は西洋史研究の遅れてゐる事情や西洋史家の本邦史界への貢獻から西洋史研究の發達の年代區分、並にその發達の趨勢に及んでこれらを略説されてゐるが、大森氏のは經驗的、中山氏のは系統的、大類氏のは批判的とも解せられ、こゝに三様の性格・史風が窺へさうな氣がする。また松本教授の論文は明治時代の文化史家としての福澤先生、田口博士、北川藤太、室田充美氏以下の論著を捉へ來たつて、それに一々明快なる解説と批判とを施しつゝ同時代に於ける文化史研究の大勢を説かれたものであるが、筆者も自ら斷られてゐるやうに論述が後半程簡單になつてゐることは残り多い。平泉博士の「思想史」は僅に四頁に足りない小論文でありながら、我が一般歴史家殊に若き史學者、思想史研究者に對して、先人の今迄とり來れる研究態度に至らざる點あるを指摘して、彼等に深き反省を促してゐる點に於て注目に價する。至らざる點とは何であるか、博士に従へば「その一つは、從來歴史家の通例として、思想の深き内容に立入る事を欲せず、それはいはゞ歴史家の領域外にあるものとして、史家の活動を極めて表面的な、殆んど年代記的な範圍に限局した事である。」「第二に注意すべき事は、思想史に對する思想そのものが、つまり歴史家の思想そのものが、一般的に之をいへば、西洋思想によるものであつて、未だ十分日本的ならず、日本精神の自然の展開と見る能はずして、むしろ西洋思想の採用による日本思想の批判となつてゐる事が多い事である。」といふのである。そして博

士の反省を求めらるゝ際といふのは、歴史家が史料の蒐集、吟味、整理より進んで人々の内面的な生活、思想の問題に打入らんこと、及び眞に日本精神に目ざめ、先哲の思想を闡明するに至らんこと、是れである。しかし、博士の主張さるゝ日本精神とは何であるかといふことが、本書で明にされてゐない以上、今直ちに博士の意見に賛意を表し難いものがある。

本書に収載された其他の論文に至つては、まだ之を熟讀する機会を得てゐないので、暫く論議を差控へねばならぬが、いづれにもせよ、これらの論文が筆者得意の領域のものであるところを見れば、われらはその内容に十分信を置いて可なりと信ずる。

なほ本書の巻頭に、今は物故された明治史學界の元老達の肖像や筆蹟を挿入してあるのは、これらの人々の功績を表象する意味に於て、然るべき試みであつたと喜ぶと同時に、「その項目において資料の復刻刊行等の業績において、収載すべきである著書・論文の總目において、缺くるところあるを聊か物足りなく感ずる。最後に、已に半世紀の業績を持つ日本の近代的歴史學に、その過去の最初の見透しを與ふべきこの書物を提供して、史學の將來に向つて多くの示唆を投げ掛けられた執筆者並びに編輯者の勞苦を多とし、且つこの種の事業の進展を期待しつゝ筆を擱く。(伊丹榮七郎)

### 國民精神の淵源 (村岡典嗣著)

本書は、日本思想史の權威、村岡典嗣氏の著はすところである。著者先づ、思想は本來一般的のものであるが、その國々に依つ

て國民思想としての一つの特色といふものがあるといふこと、そしてそれは多くの人が一般的に持つてゐるところの一つの國體觀念であり、古事記の成立の由來とその性質——それは、傳承的性質の書物として編纂されたといふこと、それは又、歴史書でもなければ宗教的・道徳的の經典でもなく、その性質は、極めて素朴單純なものである、といふこと——とが、この國體觀念を導いてゐるのであるといふこと、そして吾々は如何にしてその國體觀念を把握すべきであるかといふと、それは神代傳説の文獻學的解釋に依らなければならぬ、といつたやうな見地から、神代傳説に於ける諸觀念と思想的傾向とを究明し、(その研究の方法にも、その一々の解釋にも傾聴すべきものがあるのであるが、例へば、神代傳説に於ける諸觀念を先づ分拆し、それを更に再び綜合して、そこに思想的傾向を認めんとする方法、神代傳説に現はれたる吉凶相生説、若しくは吉凶二元説とでもいつたやうな一種の辨證法的な考へ方は、單に古代思想としてばかりでなく、極く原始的な哲學思想の一形式である、と考へられるとする解釋の如き)結局神代傳説は、天照大神といふ一大神格に依つて綜合統一されるのであるといふこと、天照大神といふ神格は、現人神としての天皇に對する尊敬の反映と考へねばならぬといふこと、更に現人神として、國家の中心たるべき尊い方であるが故に、宇宙最大の神なる太陽神の子孫であるといふことになるのであつて、これは天皇に對する絶対尊敬であり、一面に於いては、國家即天皇、天皇即國家といふ、天皇至上主義の國家主義を意味することになるといふことを述べ、最後に、主權者と國土とは、神に起源を有すると